運動嫌いになる要因に関する検討―幼児の生活に密着して―

福田　まゆ（鳴門教育大学大学院）

１．目的

本研究では，幼児の運動嫌いや運動離れが始まる要因に着目し，幼稚園での運動遊びに参与観察者として入り込み，運動遊びに積極的な子とそうでない子や運動遊びをしている時の子どもの気持ちなどを解釈することを通して，保育環境や保育者のかかわり方について考察することを目的とした。

２．方法

実際に幼児の日常の運動遊びに参与観察者として入り込みエスノグラフィーを用い，収集したデータを文字テキスト化した。そして，子どもの様子や保育者のかかわりを解釈するために，大谷（2008）が開発した質的分析方法の１つである，SCAT のフォームを使用して分析を行った。

１）対象者：鳴門市内のＳ幼稚園園児
（４歳児 12 名，５歳児 18 名）
Ｎ幼稚園教諭（保育者）

２）調査時期：2019 年１月から３月（Ｓ幼稚園）
2019 年９月から 12 月（Ｎ幼稚園）

３）分析方法：エスノグラフィーで収集した質的データを SCAT を用いて子どもの内面を解釈し，保育環境や保育者のかかわりの視点からまとめた。

３．結果と考察

番号	対象者	場面	テキスト	<1>テキスト中の注目すべき語句	<2>テキスト中の語句の言いかえ	<3>左を説明するようなテキスト外の概念(関係的要因（人的・物的）<4>テーマ・構成概念（前後や全体の文脈を考慮して）
24	Ａちゃん	体操・ランニング（一斉）	年長が先に走り，後ろから年中が走っている。走り出す前からだるそうにしている年長の子は走り始めてからも列から遅れている。「年中さんから追い抜かれるよ！」と言うと一生懸命走り始めた。	やる気がなさそうな下の子に抜かされそうになると一生懸命に走る。	意欲がでない	音楽は流れているが，走る動機付けがない。幼児にしては走る距離が長い。
31	Ｙちゃん	生活発表会練習	みんな作業しているが何もせずにうろうろしている。どうしたのか聞くと，「やることない。」と言っている。小道具も完成し，特技のフラフープの練習も終きつまらなそうにしている。	特技のフラフープの練習にも飽き，つまらなそうにしている。	意欲がでない	特技（得意なこと）でも，やりたいやりたくない（好み好みではない）は別。
22	Ａちゃん	体操・ランニング（一斉）	体操に参加しない。ランニングではいつも最後尾だが，今は前のほうに行き走っている。寒いのか，ポケットに手を入れて走っている。	寒いのか，ポケットに手を入れて走っている。	体操には意欲がない。ランニングには意欲的	体操をする意味が分かっていない。幼児にしては走る距離が長い。
11	全体	なわとび（一斉）	みんなで円になり，回数を数えながら跳んでいる。跳べる回数が100回以下の子もいれば，100回近く跳べる子もいる。ひっかかった子に座り低の子が跳んでいる回数をみんなで数えている。	ひっかかった子は座る	比較	回数を数えることでたくさん跳べる子はみんなからも褒められ，意欲がつけられている。一歩，あまり跳べない子はずっと見なければならないので，やる気が使されにくい。
ストーリーライン（現時点で言えること）			・活動に参加しているものの，主体的ではなくやる気がなく，自分なりの問題や課題，目標をもって取り組んでいる様子が見られない。 ・何か動機付けに欠けていることが推測される。			
理論記述			やろうとする動機付けとなる要因が欠けている可能性がある。			

図１　SCATフォームの一部

図１は，Ａちゃん，Ｙちゃんが運動に参加している様子から，それぞれの幼児の内面を SCAT ファームに整理し，解釈しようとしたものである。

この日の運動環境は，“ランニングの際に音楽を流す”や“なわとびをするときに回数を数える”など，多くの子どもに対してやろうとする動機付けに配慮して設定されていた。しかし，下に示すストーリーラインと理論記述では，幼児全員がやろうとする動機付けに繋がってないと解釈できた。

ストーリーライン（現時点で言えること）	・活動に参加しているものの，主体的ではなくやる気がなく，自分なりの問題や課題，目標をもって取り組んでいる様子が見られない。 ・何か動機付けにかけていることが推測される。
理論記述	やろうとする動機付けとなる要因がかけている可能性がある。

図２　図１のストーリーラインと理論記述

このように分析（ストーリーライン，理論記述を元に６人で分析）を進めていくと，・幼児が活動への期待や見通しがもてていない，・つまずきなどを乗り越えるための保育者とのふれあいが欠けている，・経験や能力に対する配慮や個人差に対する援助が見られない，・多くの幼児が楽しめるためのルールの設定や共有が不十分である，・自分の存在や頑張りを認めてくれたり褒めてくれたりする人の存在が不足している，・場や空間，距離，活動のスキルなどが幼児にとって適当でない，などが運動嫌いにつながる要因ではないかと考えた。

４．結論

遊びとは「やりましょう」と言われてするのではなく，幼児が自発的に活動することが重要であり，「場の構成」，「使う用具」，「ルール」などすべて幼児からの提案で行うことがことが理想である。今はやりたくないのにやらされているという，保育者がもっている教育的価値と幼児の思いや願いとのズレが生じている中で遊んでいたことが，運動に対して苦手意識をもってしまう一つの要因になっているのではないかと結論付けた。

＜参考文献＞

１）大谷尚（2008）4 ステップコーディングによる質的データ分析手法　SCAT の提案，名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要，第 54 巻第２号，pp.27-41